

# 植物と一体化したガーデンチェアの研究

—ものへの愛着を促す提案—

## Garden Chairs that integrate with Plants

“Proposals that encourage attachment to things”

### ■ 清水 翔 Sho Shimizu

愛知県立芸術大学大学院 春田登紀雄研究室

*Aichi University of the Arts*

### ■ キーワード：家具、園芸、植物、愛着、ガーデンチェア

#### はじめに

家具や洋服、映画や情報コンテンツサービスなど様々な分野での「ファスト化」が加速しており、安く早く簡単にありとあらゆるものを手に取ることができるようになってきている。人々が生活に取り入れる物事を選択肢が広がる一方で、サステナブルなど環境意識を求める現代で、愛着を持って物を大事にするものの関心もまた高まっている。こうした背景のもと、本研究では機能以外の点で愛着が生まれるような新しい家具、特にガーデンチェアを対象として提案する。

ガーデンチェアとはその名の通り、屋外の庭などで使用するための椅子である。昔からガーデニングを楽しむ文化のある欧米ではポピュラーな椅子で、主にガーデンやテラスなど外で使われるために、雨風に当たっても劣化のないアイアンなどの素材で作られている。椅子だけでなく同じようにテーブルやベンチなどの展開もあり、ガーデンファニチャーの一つとして楽しまれている。現在では、木製、プラスチック製、真鍮製、藤製、スチール製など様々な素材のものがある。

屋外で使用されることを考えられて作られているため、座面や背面に透かしがあることや、複数枚の板の隙間を空けて並べて作られており、水捌けが良くなるように工夫されて作られているのも特徴の一つである。室内に用いられるインテリアには用途やシーンに合わせて姿形などにあらゆるバリエーションがある一方で、ガーデニングチェアにおいては、座る家具としての一つの大きな用途があるのみで、進化が止まっているように感じる。

そこで本研究では、完成するまでの余地を残すことで、その体験を物事に対する愛着を生み出すアプローチとして「作り手二分、使い手八分」をコンセプトにする。機能的で便利なだけのものや、一時のトレンドに合わせたものを短期間で消費していくのではなく、長く人と付き合っていくようなプロダクトを目指す。本研究では、人が手をかけて育てていくガーデニ

ングと、そこに家具として置くガーデニングチェアを物理的に掛け合わせ、外用の椅子でしかないガーデンチェアを、庭に置くからこそその家具として制作していき、人が生活の中で椅子を育てていくように関わっていくことを目的とする。

#### 3. 先行事例

##### 3.1. FULL GROWNによる椅子 (2018)

FULL GROWN は、イギリスで活動するアリス・モンローとギャビン・モンローという夫婦が立ち上げたブランドだ。FULL GROWNが栽培するのは、イスやランプカバー、テーブルなどの家具だ。木にフレームを当てて纏わりつかせ、接ぎ木や剪定を繰り返しながら育てることで家具を形成する(図1)。木を使った家具は、生産過程で多くの無駄が生じてしまう。捨てられてしまう部分を減らして家具を作れないかという思いから、FULL GROWNの取り組みは始まった。

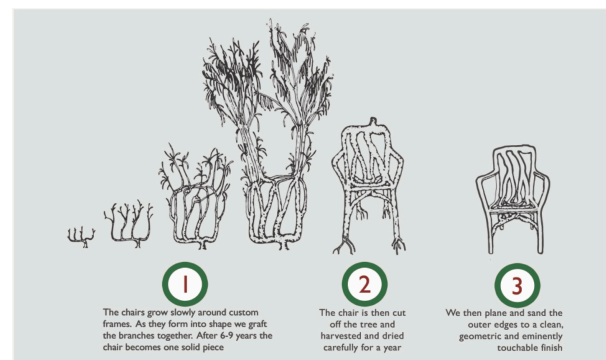


図1. 制作プロセス

古くから人は FULL GROWN のような方法で家具を作ってきた。例えば古代ギリシャでは、同じような方法でスツールなどが作られていたそうだ。こういった手法に加えて、代表のモンロー夫妻は 10 年もの間、木形成や植物を使った工業製品について研究を積み重ねてきた。取り入れたのは最新の

研究だけではない。モンロー夫妻は、家具を育てるという構想を盆栽から思いついたと言う。幼い頃に見た盆栽が、まるでイスのような形をしていたことを彼らはずっと覚えていたのだ。家具を栽培するというアイデアは、様々な経験や研究を経て形になった(図2)。



図 2. FULL GROWN による椅子

この取り組みでは、椅子を栽培するといった植物と組み合わせた変化性がある。植物が育つことで椅子が形作られている。しかし、作り手によって椅子を完成させてしまっている本研究でのコンセプトである「作り手二分、使い手八分」にはあっていない。また、基本的には室内用の家具となっている。外で扱うとなると、植物であった部分はただの木材になってしまっているため、湿気の影響を多く受ける室外には持ち出せないだろう。

### 3.2. THE NATURE MANIFESTO (2009)

この椅子はスウェーデンのコンストファック大学芸術工芸デザイン領域大学院の生徒であるミッシェル・ビュシエンが制作した。自然から生まれ進化してきた人々はいつの間にか自然と人々を区別してしまっているという考えから、もう一度人々の生活に自然を取り込むことをテーマにしている。植物がアクリル板の椅子の中に入り、土の中から生えたツタを椅子の内部に這わせた作品(図3)。



図 3.内部構造



図 4.椅子全体像

この作品は、単体で移動するのではなく土台があってキャスター式であるため実用性が低い(図4)。しかし、人が何を植えていくかによって姿を変える楽しさがある。

### 3.3. オーガニックビル (1993)

壁に 132 の植木鉢が付いており、まさに「オーガニック(有機的)」で奇抜なビルである(図5)。イタリアの建築家、ガエタノ・ペシエがデザインした。これが老舗の本社屋と聞くと意外

な気がするけれど、1848 年の創業以来、健康に良い自然な昆布を扱ってきた店である。大阪の中央区南船場にて現在も建築当初と変わらない姿で佇んでいる。



図5.建物全体



図6.外壁部分

この建築物の特徴は、テラコッタ風外壁であることと、コンピュータ制御の給水システムで管理される 132 個の植栽があることの二つだと考える。テラコッタ風の外壁は、人々の中で潜在的に持っているであろう、植木鉢のイメージから選択したものと考える(図6)。これにより、様々な形をした植木鉢が窓辺に並んでいるような印象と、また均等で外壁に埋め込まれているという点から奇妙で異様な光景にも映る。



図7. ビル躯体を通りポットに直接給水される仕組み

そして、コンピュータ制御の給水システムによって、ビルに張り巡らされたパイプから自動で給水される(図7)。植物を育てるアイテムが建築物と合体しているような作品だが、植物を育てる体験は排除されたものになっている。

## 4. 調査

### 4. ガーデンチェアについて取材

実施予定

### 5. 蔓性植物を用いたガーデンチェア

#### 5.1. アイデアスケッチ

屋外で使用されることを考えられて作られているため、座面や背面に透かしがあることや、複数枚の板の隙間を空けて並べて作られており、水捌けが良くなるように工夫されて作られているという特徴を活かした椅子である。蔓性植物が巻きつくように足元にポットの役割を果たすものを設置し、椅子と植物が植木鉢から一緒に生えているようなものになっている。

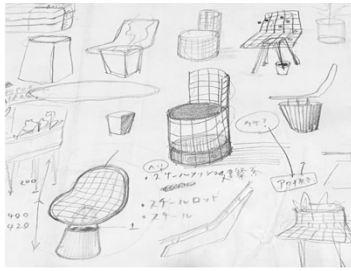


図8. 仮説アイデアスケッチ1

## 5.2. 素材

蔦性植物を用いたガーデンチェアでは、植木鉢から植物とともに椅子が生えてきているかのような形を想定していたため、湿気に強い必要がある。鉄棒を主な素材とし、銅を用いて溶接して骨組みを作る。仕上げには、錆止め剤を塗布した後に塗装することで湿気によるサビ付きを防ぐ。

椅子に使用する植木鉢は、常滑焼のテラコッタのもので、一般的な植木鉢として人々のアイコンになっているものを使用する。そうすることで、よく知っているアイコン的な観葉植物の違和感として椅子が引き立って見える。

## 5.3. 植物

這性の植物の中から、年中葉が落ちない植物を選択する。試作で使用するのは、グレブリア サンキストウォーターズ、ローズマリー、ハツユキカズラである(図9)。



図9.今回使用する植物(左から名前順)

グレブリア サンキストウォーターズは四季咲きでピンクの花をつける。ローズマリーはシソ科の料理などにも用いられる植物で、良い香りを放つため、椅子に座った時に香りを楽しむ体験が加わる可能性が考えられる。ハツユキカズラはピンクの葉が特徴で、色彩で椅子に変化を与える可能性がある。

## 5.4. 植木鉢

椅子に使用する植木鉢は、常滑焼のテラコッタのもので、一般的な植木鉢として人々のアイコンになっているものを使用する。誰もが一度は見たことがある常滑焼の植木鉢の印象を与えるためである。そうすることで、よく知っているアイコン的な観葉植物の違和感として椅子が引き立って見える。

また、今後椅子の形に、ベンチ型や肘掛け付きなどのバリエーションを持たせることを視野に入れる際はそれに伴って植木鉢の形や大きさにもバリエーションを持たせる必要がある。

## 5.5. 構造

座面と背面は植物が巻き付きやすいように網目状にする。座面と背面や座面と植木鉢との接合パーツはその網目に沿わせた形に制作し、全体の形の印象を壊さないようにする(図10)。

座面と植木鉢の接合部分は、植木鉢に穴を開け接合パ

ーツを差し込んだ。植木鉢は、製品を用いるだけでなく、より座面との安定した接合が実現する形を探る必要があることがわかった(図11)。



図10.接合パーツの見え方



図11. 座面と植木鉢の接合構造

## 5.6. 試作検討

初めに、塗装などを含めずに構造検討のための試作を行う。構造が決まり次第塗装の検討を行う(図12.13)。



図12.13. グレブリア サンキストウォーターズを用いた試作

試作を経た課題として、植木鉢と接合パーツをより安定させること、植木鉢の検討、座面と背面の座りやすさ、また、植木鉢の底面の面積が少なすぎるため足回りが不安定になってしまっていることなどの点が上がった。植物がどう巻きつくのかは、今後経過観察をして検討する(図14)。



図14. グレブリア サンキストウォーターズが巻きつく様子

## 6. 石畳のような構成のガーデンチェア

### 6.1 アイデアスケッチ

椅子全体をタイルで覆い、その隙間から雑草を育てることで、植物を組み合わせた椅子になっている(図15)。タイルで覆われている中身は中空になっており、その中に土が詰まっていることを想定している。

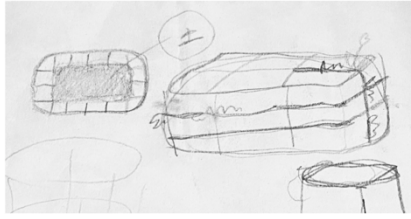


図15. 仮説アイデアスケッチ1

## 6.2. 植物

椅子全体のシルエットを壊さぬようにあまり背の高くならない植物であるといいため、クローバーなどの平たく繁殖する植物を選択する。

## 6.3. タイル

お風呂のタイルでもみられる焼き物製の釉薬がかかって艶のあるものを選択する。

## 6.4. 構造

骨組みを鉄棒で制作し一枚一枚タイルをはめ込んでいく。その際に植物が出てくる隙間を作っておく。隙間に土を入れてただけだと、側面になってくる部分は土が溢れてしまうため、少し荒いメッシュの布で覆う。

## 6.5. 試作検討

執筆予定

## 9. おわりに

執筆予定

## 10. 他参考文献

- ・ 今江秀史(2020)『京都発・庭の歴史』世界思想社
- ・ 宮前保子(2001)『イングリッシュガーデンの源流-ミス・ジーギルの花の庭-』学芸出版社
- ・ FULL GROW 公式(2018)『GROWING THE FUTURE 公式 HP』(2024年1月28日最終閲覧)  
<https://fullgrown.co.uk>
- ・ Hiromitsu Morimoto (2008)『オーガニックビル/ガエタノ・ペッシェ』(2024年1月28日最終閲覧)  
[https://hetgallery.com/organic\\_building\\_photos.html](https://hetgallery.com/organic_building_photos.html)
- ・ コンストファック大学芸術工芸デザイン学部公式 HP (2009)『THE NATURE MANIFESTO』(2024年1月28日最終閲覧)

## 11. 謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教官の〇〇〇〇教授から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。